

くなる。人間を集めるトロツコははずせと。

さあ、てんやわんやである。私が長である。長とその後
の指揮者は即刻事務所に来い。後の者はアブナくない
よう、時間まで木を切れ、である。事務所といつてもそ
まつな物だ。昔の野戦の建物（幕舎）の上品なようなも
の。寒い寒い、お湯が一パイもない。サア、理由を言
なさい、である。お前はソ連国法をおかした罪人である
かのようなことである。向こうの立場でいえば正統
で、私から思えば罪をきせられ、胸を、又は頭をうち抜
くような手ぶり足ぶりである。もう私等は身の毛もよだ
つ心境で、まさにこれでおしまいかとも思ったほどだっ
た。

二時間以上も、結局、かたことまじりの通訳の人がは
いり、一週間くらい留置いりで、まずはきまり、シベリ
アの留置は此の世の終わりかと思われ、手足のおおるの
がわかった。そのような事情から、労働条件や作業器具
の改善、又は建物の改良等、逐次事情もわかってきたよ
うだった。が、なんといつても寒さと食べ物の量の少な
いこと、寝いていても食物がノドを通る音が聞こえるよう

な気になり、幾度となく目がさめて、その内の何度か、
さえわたる夜空の星を眺め、北斗七星の位置より逐次連
想をしながら寝て、そしてまた起きてと、まったく生活
の不安さもこの辺にあるようだった。

その一年半後に、従弟の一郎君の戦病死（戦死）をあ
の広いシベリアの一角で、今に思えば、どこの人かわか
らぬ人より、風呂の火をたきながら（白樺の木が燃料）
聞く。ゾットする思いでまったくまんじりともせず、一
夜を過ごした。

捕虜としてソ連に連行された

苦しみの思い出

東京都 常世田 千代松

シベリア鉄道の中間駅に降車

厳しい行進の開始

牡丹江を出発した臨時軍用列車は、朝七時ごろシベリ
ア鉄道の中間駅イスベストコーバヤに到着した。車両ご

とに朝食を受領、食事を食べた。終わったと思ったら早速出発だ。約二時間あまり行進すると小休止をくり返しながら進み、夜はソ連囚人小屋に軍服を着用したまま、持参の毛布を敷いて假泊、晴れた日も、みぞれまじりの小雪ふる日も、日本兵は馬車馬のごとく黙々と、ソ連監視兵（カンボーイ）に引率されながら地獄の行進をつづけた。

行先はどこか判らないが、シベリアの大自然のなかにも、日本の小春日和があつて、行進中に汗がでてのどがかわいた。道路の両側には小川のセラギがチョロチョロと音を立てて流れ、美しく透きとおって見えた。日本兵はこの冷水をおいしく飲んでのどをうるおした。冷水を飲む日本兵を見ると、ソ連監視兵はイビツヨマツチを連発して制止した。日本兵はのどの渇きをいやすためかくれて飲んだ。

行進途中の苦勞と腹痛を訴える兵

行進途中に多くの戦友も、私も原因不明の軽い下痢症状になって苦しかった。大便に少量の血液がまじり、腹部がシクシク痛んだ。どうにか行進にはついていけた。

戦友の中には下痢症状が激しくて歩行困難な者がいた。さいわい時々道路上をトラックが通過したので、ソ連監視兵はストップを命じ、戦友を乗車させ、次の假泊予定地まで先送りをしてくれた。

行進についてゆけなくなり、隊列から落伍していく戦友も毎日何人かだ。ソ連監視兵はダワイ、ダワイ（早く、早く）と最後部までおくらせてしまった戦友の尻を、マンドリン銃の台尻でたたいて、日本兵を叱咤した。ソ連監視兵には落伍者をだすと処罰されるという責任感があつたときく。

山間の電灯のある小さな町（テルマ）に到着

十一月三日のように記憶する。山奥の電灯のついている町にたどりついた。

高田作業大隊はここで四日間の大休止をすると連絡されてきた。それはソ連の革命、戦勝記念のためだった。露営、自炊すると指示され、私の班はたき木拾いを分担、付近の積雪のなかからたき木をしゅうしゅうして帰った。

寒さと疲労から下腹部が激しく痛みだし、下痢も伴っ

てがまんできず、織田軍医の診察を受けた。薬はなく処置出来ないから常世田兵長は部隊を離れ、假病棟にいくよう指示され、ここ（テルマ）で生死をともししてきた戦友達と抱き合って、泣きながら別れを惜んだ。

假病棟（学校の二階）に隔離

ソ連のトラックで假病棟に送られた。そこは学校の講堂の二階で、筵が敷いてあった。

満洲海林（ハイリン）から持参した毛布を敷布団に、軍服を着たまま、外套を背中にかけて寝た。部屋はベーチカがあつて暖かかった。軍服や下着類は海林（ハイリン）で着用したまま着替えていない。着ていた毛シャツを脱いで吃驚、織り目にはシラミが頭隠して尻隠さず、一杯巢喰い、卵も真白に産みつけられていた。

一生懸命つぶしたが、余りに多く、病人の私は疲れて殺す氣を失い、そのまま毛シャツを着てしまった。同室の戦友達も同じ状況であつた。

郷土の戦友、高梨忠平君の死を偲ぶ

人生なんてなんと憐れで、寂しいものだろう。夕べに語り合った戦友が、今朝、私が目覚めて、「おい。高梨

君」と声をかけた。前日までは低い声で「なんだい」と返事が返ってきたが、応答がない。這って側に行き身体を揺り動かしたが、もう冷たく口を開かない。死の苦しみも、悲しみも私はきいていない。

嗚呼、悲しいかな。お互い生きて郷土に帰ったら、髪と爪を自宅に届け合おうと紙に包んで前日交換したばかりだ。私も明日の生命は分らない。さびしい限りだ。高梨君の遺体は担架に乗せて運んでいかれた。

生きて永久に高梨君とは言葉をかわすことはできない。無言のうちに永遠の別れとなった。私の脳裏から、あの当時の悲惨さは永久に忘れ去ることは出来ない。

続いて伊藤吉次君、鎌田正事古年兵の死亡

同じ内務班で最も親しかった伊藤吉次君、鎌田正事古年兵の三人が寢床の一角に集まり、高梨君は死亡した。我々は元気で祖国日本に帰ろう。高梨君の霊をなぐさめよう。病気に負けず、強い根性と信念を持って生き、頑張つて、頑張つて絶対死ぬものかと、何度も何度も強くはげまし合つて寢床に帰つた。

翌朝、隣りの伊藤君、その隣りの鎌田古年兵を呼んで

みた。二人共返事がない。「あれ」と思って両戦友の側にはっていき、顔をのぞき見ると、よく眠っているようだ。身体にさわってみたが反応がない。手足も冷たくなっていた。呼べども口は開かない。

私は吃驚仰天、大声をだしソ連兵を呼んだ。はいってきたソ連兵は一目みて二人は死亡していると判断、同僚と伊藤君、鎌田古年兵を担架に乗せて運んでいった。

私は茫然失神状態になった。運命とは何と非情なものか。情けないまことに憐れな死の惜別であった。生きていると云う心地がまったくなくなってしまった。

明日は我が身が同じ運命をたどるかと思うと、物凄く寂しさに襲われ、その日は悲しくて便所に行くだけで、外套を頭からすっぽり蒙って、一人さびしく物思いにふけた。

夕方になり、明日もまた幾人かの戦友が、或いは自分が死んでいくのかと思うと、不安で不安でたまらなかったが、いつしか眠りについた。

試験により祖国に帰る

千葉県 関口 善一郎

ソ連抑留の一断片

私の四年余りの抑留生活で最後の「ラーゲル」は昭和二十四年八月ごろで、特殊混成集団の収容所であった。入所して幾日もすぎないある日、突然ソ連軍思想部員と思われる軍人の指示により、試験をするという指示により教室らしき一室にはいった。抑留者の同胞達は緊張しきった雰囲気で受験態度も真剣そのものであったことを、四十年余経過した今でも、その光景を忘れることなく記憶している。

やがてアクチーブ、思想教育指導者ソ連軍人の監視のもとに試験用紙が配布された。内容的には具体的出題項目については忘れたが、概要は抑留中各ラーゲルで学習してきたマルクス・レーニン主義、エンゲルス、史的唯物論、ソ連共産党史等の理解力をためすものの単語、文